

李大釗と中国社会党

—— 加入か否かをめぐって ——

後藤延子

一 はじめに

中国社会党は辛亥革命以後、雨後の筍の如く簇生した政治結社の一つである⁽¹⁾。それは江亢虎により1911年11月5日組織され、上海に本部を置いて精力的に党勢拡大を推し進め、13年5月頃には支部400以上、黨員数50万余という規模に達したという⁽²⁾。だがこの未曾有の大勢力を結集した政治結社は、13年8月、北京支部の責任者陳翼龍が袁世凱政府に処刑され、ついで解散命令が出て、党首江亢虎が亡命するに至り、恰も掻き消える如く空中分解を遂げた。以後、中国社会黨員であった人々もその事について言及すること少なく⁽³⁾、その組織や活動の実態についても、近年に至るまで研究されることが少なかった⁽⁴⁾。

さて、この中国社会党と李大釗との関係を最初に指摘したのは、張次溪『李大釗先生伝』（宣文書店 1951年）である。それによると、中国社会党北京支部が結成されるや、社会の改造に志があった李大釗はそれに共鳴し、天津支部の任務を担当したが、社会党が解散させられて後、同窓の友人郭須静と日本に逃がれたとある。この張次溪の伝記は、1911年に日本に渡ったなど、記述に正確を欠く箇所も多々見られ、どこまで信頼できるか些か躊躇させるものがあった。また中国社会党の党首江亢虎が後に汪兆銘政権の要人として漢奸裁判にかけられた胡散くさい経歴をもつところから⁽⁵⁾、中国社会党自体にも疑惑の目が向けられ、李大釗と関係づけるのには警戒の念も強かった。

ところが1960年代に入り、『辛亥革命回憶録』が次々に出版され、その第六冊に、顧頡剛・曹綏之・曹嘉蔭の三人連名の『中国社会党と陳翼龍的死』という文章が発表された。そこには中国社会党結成の当初からの歩み、及び北京支部、天津支部の成立の経緯、その活動内容、陳翼龍の逮捕・刑死に至る状況について、詳細で且つ相当に確度の高い情報が盛り込まれていた。そしてその中に1912年冬、曹孝先の紹介で陳翼龍に会見した李大釗が、彼と夜を徹して語り合い深く感銘して入党の宣誓を行ない、天津支部が成立するや、総務幹事に推されたという記述があった。顧頡剛は高名な歴史学者であり、既に『古史弁自序』（『古史弁』第一冊 1926年）の中で、少年時代社会党に入党し、1年半ばかり党務に熱中して過ごしたことを率直に告白していた。その顧頡剛が、自らが参加した蘇州支部の成立以来親しく関わってきた陳翼龍の人柄、活動の足跡について初めて明かしたのである。彼は1913年北京大學預科に入学し、党務に参加しなかったとはいうものの、北京支部にはよく出入りしたという。

また曹綏之・曹嘉蔭の両名は、陳翼龍の下で北京支部の活動に参加した人物であるという。以上より、この三名の報告は一概に無視し否定できない重みをもつものであった。しかし彼等の提供する中国社会黨員としての李大釗のイメージは、北洋法政専門學堂卒業と相前後して北洋法政学会を結成して、その機関誌『言治』月刊の編輯長をつとめていた李大釗のイメ

ージと、すぐには結びつきにくい違和感があった。なぜならこの頃の李大釗は、袁世凱政権をむしろ擁護する立場から発言し、また孫洪伊や湯化龍ら進歩党のリーダーと連絡をもっていたという事実があったからである⁽⁶⁾。そして伝聞による張次溪の指摘よりも、中国社会党に入党しその活動に参加した顧頡剛ら三名の報告の方が信憑性が高いとしても、しかし彼らとても李大釗と中国社会党との関わりについて、確実な証拠を提出できたわけではない。それゆえ結局、クェスチョンマークを付して保留されざるをえなかった。

その後、1950年代に編集に着手されていた文史資料が、文革を経て陸続と刊行され始めた。そして『文史資料選輯』第75輯に、張次溪の『陳翼龍先生事蹟匯輯』、及びそれを読んでの感想である鄧穎超（中国社会党天津支部所属の楊宝峰の娘、周恩来夫人）の『読後補志』、更に顧頡剛の『我辜負了陳翼龍烈士的重託』の三編が掲載された。張次溪が蒐集・整理したのは、曹百善（孝先）の談話、曹嘉蔭の談話とその『陳翼龍先生奮闘史略』、及び1916年の陶秋士の『陳翼龍烈士事略』であり、更に附録として、陳翼龍の1913年7月12日付の曹嘉蔭ら宛の手紙、1913年8月の北京の群強報と広州の震旦報の記事、1912年6月9日成立の西塘支部成立大会での陳翼龍の演説詞、『社会世界』雑誌の主義六条、が採録されている。

さてその曹百善の談話によると、彼の紹介で陳翼龍に会って入党した李大釗は、呉稚暉に口利きを頼んで警察の干渉をうまくかわして天津支部の結成にこぎつけ、支部成立後は郭須静とともに責任者となったという。そして社会党が解散命令に遭うや、郷里楽亭県の祥雲島に逃がれ、郭須静も李大釗のあとを追って祥雲島に避難し、その後二人で日本に渡ったという。曹嘉蔭の談話も、陳翼龍との面会後の李大釗が、郭須静とともに天津支部の結成に中心となって尽力したとする。そして『陳翼龍先生奮闘史略』では、李大釗が天津支部の総務幹事に選ばれたと述べている。

ところで『文史資料選輯』第75輯の陳翼龍に関する三編のうち、李大釗と中国社会党との関係について述べているのは、以上の曹百善と曹嘉蔭の証言のみである。そして、1981年発行の『中国無政府主義和中国社会党』（中国第二歴史檔案館編 江蘇人民出版社）の中には、天津支部について比較的多くの檔案が収録されているにもかかわらず、天津支部への李大釗の関与を物語る資料は片鱗だにも見当たらない。

しかも奇妙なことに、李大釗と中国社会党との関わりを述べた、上述のすべての発言はみな1949年以後に発表されたものである。そして49年以前の、張次溪の『陳翼龍先生事蹟匯輯』の中の陶秋士『陳翼龍烈士事略』にも、附録として収録されているものの中にも、李大釗のことは見えない。ただ陳翼龍の1913年7月12日付の曹嘉蔭ら宛の手紙の中に、一つ気になる箇所がないわけではない。それは、「須静兄がもし北京に到着しているなら、どうか私の帰京を待ってそれから帰省してほしい」との一文である。ここの「須静兄」が、李大釗と中国社会党との関係が指摘される際に、必ずと言ってよいほど李大釗と一対をなして言及される郭須静を指すとしたら、あるいはとの思いが胸をよぎるのを如何ともしがたいのである。

従って以上より、この李大釗と中国社会党との関係は、解決が容易でない難問として、李大釗研究者を困惑に陥れるものとなっている。黙殺はできないものの、確実な証拠が見当たらない以上、肯定も否定も簡単には結論できるものではない。伝記や回想録といった二次資料を鵜呑みにして、性急に結論に走る安易な藝当が性に合わぬとすれば、難問を解く鍵が見つかるまで沈黙したまま行んで待つ以外にはない。

さて今回、私は些か蛮勇を奮ってこの難問の解明に挑戦してみた。果して十分に納得せしめるに足る、確かな資料の根拠と無理のない推論による論証とが提出できるか否か、若干の懸念がないわけではない。が、ともあれ一つの判断を示し、大方の叱正を乞いたいと思う。そしてこの難問に挑む過程で、民国初年にあれ程までの多くの人々を引きつけた中国社会党とは一体いかなる性格の政治結社であったのか、中国社会主義思想史においていかなる意義を有しているのか、こうした問題に接近する端緒を掴むことができればと考えている。

さて中国社会党天津支部の成立をめぐる経緯から、まず考察を開始しよう。

二 中国社会党天津支部をめぐる問題

前述のように、1911年11月5日（辛亥9月5日）、江亢虎は同年7月に結成した社会主義研究会を改組して、中国社会党を発足させた。それからほぼ2週間後、黨員も約百名に増え、上海の本部所在地も決まり、「中国社会党規章」も完成した⁽⁷⁾。そこで早速、黨員の拡大、各地に支部を設置する活動が始まった。

1912年1月1日、中華民国臨時大總統に就任した孫文は、江亢虎との談話の中で、自らを「完全な社会主義家」と称し、社会主義の理論を広く鼓吹して全国の人々に普及させる必要があると賛意を表明した。そして彼が持ち帰った欧米の最新の社会主義の書籍を江亢虎に贈り、翻訳・刊行して宣伝の材料とすることを希望した⁽⁸⁾。こうして大總統のお墨付きを貰った中国社会党は、更にはずみがつき、全国各地からの問い合わせの手紙が相繼ぐと同時に、1月30日の第一回聯合大会では、支部30余り、黨員四、五千人という爆発的な増加ぶりを見せた⁽⁹⁾。

だが4月に入って臨時大總統の地位が袁世凱に移るや、既に2月の段階から開会を阻止する強硬な姿勢を示して紛糾を起こしていた湖南都督譚延闓が、武力による長沙支部の解散、代表5人の逮捕に出てきた⁽¹⁰⁾。また副總統黎元洪のお膝元湖北省荊門県の知事による支部解散命令なども出て、一方で支部の増加や平民学校の設立など着実に前進を示してはいるものの、トラブルも目立つようになった⁽¹¹⁾。

こうした干渉を前もって防ぐため、江亢虎は唐紹儀総理に会見を申し込み、社会党について詳しく説明して諒解を得、また唐紹儀の提案した地税の国家への納入の実験地区として崇明島を推薦し、唐紹儀の協力の約束をとりつけた⁽¹²⁾。だがこうした努力も、譚延闓や黎元洪の弾圧の強い意志には無効であった。中国社会党本部は特に代表を派遣して交渉に当らせると同時に、各地の支部からの抗議の電報を譚延闓と黎元洪に集中させた⁽¹³⁾。また共同歩調をとる諸団体（大同民党、自由党、共和憲政党、女子協済社、惜陰公会、中華工党、万国改良会、東亜大同党、同盟会など）に呼びかけて連合会を開き、袁世凱、參議院、譚延闓、黎元洪に抗議の電報を打った⁽¹⁴⁾。更に以前から袁世凱と個人的関係がある江亢虎が、袁世凱に親書を送り、抗議と要請を行なった。

さて同じ頃、天津支部の結成も暗礁に乗り上げていた。中国社会党の殆どの支部が、上海本部の近辺から波紋を広げるように成立して行った中で、北方で逸早く支部の組織に着手したのが、天津の大風日報主筆の郭究竟という人物であった。彼は既に本部成立と相前後して天津支部を発起して茶話会を計画したが、前任の巡警道に却下されて断念したことがあると

いう⁽¹⁵⁾。

4月3日、郭究竟は天津北洋巡警道道台楊以德に書簡を送り、南京政府から既に認可済みで大總統の承認も得ている社会党の天津支部成立大会の予定を告げて、配下の警察に干渉を慎むよう通達することを要請した。それに対し翌4日、楊以德から返答が寄せられた。それによると、欧米各国の社会党は無政府主義を主張していて、共和の国体とは相容れない、天津支部の趣旨、章程の提供がないので判断できない、また南京政府の認可済みで大總統の許可を得ていると言うが、そうした命令は受け取っていないので、調査して処理するべきでない、もし支部を組織したいのであれば、巡警道の認可審査のために、結社に関する規定に即して章程と趣意書を送るべきである、との内容であった。

4月24日、郭究竟は中国社会党本部からの手紙を取り次いだ。その中味は、中国社会党の社会主義は、孔子の理想とする大同の世、老子の理想とする「無為にして治す」をめざし、「無治」＝無政府を究極の理想とするが、必ずしも今すぐ無政府主義を主張するわけではない、今の学者の唱える無政府主義と中国社会党の社会主義とは異っており、概念規定の混乱は許されない、新聞紙上での社会党代表との談話で周知の如く、孫文大總統も社会党員であり、政治革命成功後は社会革命の時期であり、これは世界の人々の要求である、中国社会党の党綱と章程を見れば、共和政体と少しも衝突するものでないことがわかるであろうから、支部の結成について保護の責務を全うすべきである、というものであった。

4月27日、以上の社会党本部の縷々たる説明に対し、楊以德から返事が来た。これは今回のやりとりのしめくくりの手紙である。楊以德の論点は二つある。一つは、中国社会党が無政府主義を主張していないと言うのであれば、章程を示して証明すべきである。二つは、国体の擁護と治安の維持とを天職とする警察行政は、新聞報道とか、南京政府が認可済みで大總統が許可した云々の伝聞にではなく、明文化され全国に通達された命令に準拠して執行されるべきだということである。従ってここから次の結論が導き出される。つまり、天津支部の結成を受理し保護するという重大問題は、巡警道の権限を超えている、それゆえ集会・結社に関する規定に従って、中国社会党の趣旨と章程を内務部に送って認可の可否を審査してもらおう、都督に申請するというのである。

これが4月3日以来のやりとりの結末である。要するに天津支部の成立大会への干渉をやめるよう要請した郭究竟の書簡が、支部の趣意書と章程の提出を迫るという方向的がしばられ、更に社会党本部の書簡の中に党綱と章程を見れば理解してもらえとの発言が、恰好の言質を与えることになったのである。しかも郭究竟も社会党本部も交渉相手は楊以德と思いついていたところ、突如として楊以德は自己の権限範囲を超えているとして肩すかしを食らわせ、一挙に内務部に中国社会党自体を認可審査にかけるといふ、思いも寄らぬ方向を開いたのである。

従ってことは中国社会党の存否に関わる重大問題に発展する可能性があった。鼻面を引きずり廻され、挙句の果てに打ちちゃりを食らった郭究竟は、事態の成りゆきに仰天して考えあぐねたものと見え、本部に救いを求めた。その手紙が、5月25日付民立報の社会党消息欄に載せられている。彼は、「北方の風気は未だ開けず、社会主義を誤解しており、楊以德の反対が特に強硬である。そのため道理に明らかな者も、どっちつかずの態度で、党務が発展できない。江君（江亢虎—後藤注）の北上を切に望む」と述べている。

この手紙が届いた丁度同じ頃、江亢虎は袁世凱から遺憾の意を表した返書を受け取っていた⁽¹⁶⁾。江亢虎としては、中国社会党は臨時約法の集会結社の自由規定により結成された結社である以上、政府の正式な認可は不要であり、まして議会議政党でないからして、認可の批准を求めなければならない道理はなかった。ただ黎元洪や譚延闓は弾圧の責任を、袁世凱の社会党に対する明確な保護命令のないせいにし、相変らず干渉を続けていた。従って問題の根本的解決のためには、袁世凱との直接交渉の必要を痛感し、江亢虎は、病いをおして北上を決意した⁽¹⁷⁾。

こうして6月20日、江亢虎は陳翼龍を伴って北上の途についた⁽¹⁸⁾。ところで病状の好転を待たため、江亢虎の出発が手間取っていた間、天津での事態は更に進んでいた。6月11日、楊以徳の6月6日付の天津支部の認可要求を内務部に提出すべきだとの申請に基づき、直隸都督張錫鑾は一件書類を附して内務部に審査依頼の正式文書を発した。折り返し内務部から審査のための資料として党綱や章程の提出が要求され、郭究竟からの提供を待って、7月5日、内務部に送った⁽¹⁹⁾。

内務部は審査の結果、7月25日、中国社会党の認可申請を却下する回答を直隸都督に送った⁽²⁰⁾。その理由は、中国社会党の宣言や規約に「遺産世襲制度を破除する」等の語があり、これが臨時約法第6条第3項の財産を保有する自由があるとの規定に抵触するからだとされた。即ち、死後に遺産を国庫に入れて公有化することは、私有財産制度を保護する臨時約法に背くというのである。かくして中国社会党は認可を拒否され、非合法の政治結社であると宣告されたのである。

この事態の急転回に愕然とした江亢虎は、翌7月26日、内務部に抗議と反駁の文を寄せた⁽²¹⁾。その論点は3つである。1つは、孫文大總統、唐紹儀総理の支持を得て、臨時約法の集会結社の自由の規定に基づいて結成された組織であり、共和政治の進行、国家の存立に妨げがない、全くの合法的結社であるということである。2つは、目下は宣伝・鼓吹の時期にあり、議会議政党ではないので、認可を申請する必要はない、また天津支部は正式に成立していないので認可を申請できる筈がなく、中国社会党はこれと全く無関係で承認できないということである。3つは、中国社会党はまだ実行・着手の時期に入っていないこと、また黨員が死後に遺産を公共機関に寄附するなどのことは、私有財産の自由処分権に属するのであり、私有財産制度の保護に何ら抵触しないということである。

しかしこの江亢虎の抗議と反論に対して、内務部は各支部から殺到した電報の内容とほぼ同じだとして、殆ど取り合わなかった⁽²²⁾。内務部としてはもうこの案件は処理済みとして確定したのであり、天津支部の問題を突破口として、社会党をいつでも禁止し解散させる法的根拠を手中に確保できたのである。そしてそれは弾圧したい時には、誰でもそれを活用して合法性を主張できる、切れ味のよい伝家の宝刀と化したのである。

さて江亢虎は北上の目的である袁世凱との面談を果し、袁世凱の諒解を得ることができた⁽²³⁾。更に内務総長趙秉鈞とも面会した⁽²⁴⁾。江亢虎は、黨員郭究竟の報告によると、内務部に認可を申請する意思がなかったが、ただ天津での開会が屢々楊以徳の干渉を受け、直隸都督に援助してくれるよう頼んだにすぎない、ところが都督がそれを貿然内務部に送り、内務部がそれを貿然却下したので、中国社会党としては承認できないと述べ、内務部から楊以徳に臨時約法に違反して天津支部の開会に干渉しないよう、命令を下すことを要求した。趙

秉鈞は二つ返事で承諾し、楊以徳に電報を打ち、江亢虎の7月26日付の内務部あての文章を内務部の布告に載せて、直隸都督への回答を取り消すことを約束した。

そして8月12日、北京支部成立大会が五千人の参会者を得て盛況裡に開かれた⁽²⁵⁾。陳翼龍を北京支部主任として残留させ、江亢虎は宣伝行脚を兼ねながら湖北省に向った。しかし8月22日、武漢に到着した江亢虎は、黎元洪の密命により逮捕された⁽²⁶⁾。そしてそれと相前後して内務部は、中国社会党は現行制度を破壊する党であると決めつけて、各省に認可を許さないよう通達する文章を草している⁽²⁷⁾。それゆえ弾圧の有無は、彼我の力関係の如何と、各々の支部の所在地の都督の政治的立場などによって決定され、その対応は千差万別と言ってよかった。江亢虎は認可を申請することで弾圧を減らそうといった妥協案に対しては、「仍お敢えて苟同しない」との徹底した原則的態度に固執している⁽²⁸⁾。

さて陳翼龍の尽力の下に北京支部はスタッフの陣容も整い、事務所も確保できた⁽²⁹⁾。そして北京支部の活動が軌道に乗るや、温雄飛に代表幹事につくことを要請し、陳翼龍自身は天津支部の再建に着手することになった。その結果、12月の半ばにはほぼ見通しがつき、成立大会に向けての準備が開始したとの報告が寄せられている⁽³⁰⁾。

だが13年1月の終りに予定していた成立大会は、またもや楊以徳の内務部の不認可を振りかざしての干渉で延期を余儀なくされた。陳翼龍は内務部に楊以徳の干渉をやめさせるよう申し入れたが⁽³¹⁾、内務部は、一方で集会の自由を官庁が干渉する道理がないことを認めつつ、他方で社会党の党綱は内務部の承認を経えず、この点については処理済みであるとして、楊以徳の干渉を禁止できないと断ってきた。また楊以徳の要請により、1月29日、直隸都督馮国璋が内務部に事務所の設立、開会の許可についての照会を行った⁽³²⁾。

こうしたいつまでも埒のあかない事態に業を煮やし、陳翼龍は2月2日、成立大会を強行し、曲がりなりにも念願の天津支部が正式に発足した⁽³³⁾。とはいえ楊以徳の執拗な干渉はやむことなく、会合を開くといった通常の日常活動にも神経を尖らせ、強い緊張を強いられることになった。従って陳翼龍は天津支部の順調な発展を見届けるまでは天津に張りついていなければならなかった。そして楊以徳の悪辣な弾圧に対し、陳翼龍は4月22日、25日、5月2日と再三にわたり内務部に質問書を提出し、楊以徳の干渉に何ら道理がないことを主張した⁽³⁴⁾。それによると、楊以徳は内務部ばかりか更に工商部までも不認可にしたなどとデマをとばし、「警察は行政官庁であり、命令に服従するのが正当なやり方である」とうそぶいていたことがわかる。

こうしたあくどい干渉の中、天津支部は5月4日、全体党员大会を開いて役員を選挙し、活動を軌道に乗せることに成功した⁽³⁵⁾。支部会長は劉瑞和であり、北京支部の内部交際幹事であった傅文郁が天津支部に移ったようである⁽³⁶⁾。そして陳翼龍は本来の北京支部の任務に戻った。

とはいえ「遊撃隊」を使つての暴力的干渉、また密偵を放つての党员の行動の監視など、楊以徳の度外れた強硬な姿勢が緩むことはなかった。そして彼は直隸都督をせつては、内務部に再三照会を行なわせ、治安を妨害する違法団体として中国社会党の禁止、各支部の解散、「新刑律に従つて処罰して匪徒を懲らしめ、隱患を除く」などの命令を引き出そうと躍起になっていた⁽³⁷⁾。

しかし内務部は1月29日付の馮国璋直隸都督の咨文には回答を寄せず⁽³⁸⁾、また張家口支

部について指示を乞うた噶哈爾都統には、2月18日、本部は認可されていないが、各地の支部の設置が治安の妨害に当るか否かは、「貴都統が状況を斟酌調査して処理すべきである」と答えていた⁽³⁹⁾。そして5月28日、6月28日の二通の直隸都督の咨文に対しては、都督が巡警道に命じて調査させ、もし社会党の違法行為の確実な証拠があれば、ただちに法によって処置し、それから内務部に照会するよう回答した⁽⁴⁰⁾。

ところで果てしなく繰り返される楊以徳の干渉への応酬に、天津支部が異常な難渋さを強いられていた頃、最初に天津支部の結成に手を着けた郭究竟はどうしていたか。彼は当時は北京支部に移っていたらしく、6月16日付民立報中国社会党消息欄に、逮捕されて獄中にあった間に、『獄中十日記』をものしたので、江亢虎に序文を頼むとの手紙が載っている。そして更に7月13日付民立報中国社会党本部消息欄に、以下の『郭究竟啓事』を寄せている。

昨日北京の法言報の要件欄に、鄙人が天津で社会党の支部を組織した時、謬って内務部に認可登録を申請したので、社会党本部は郭を党員と認めない云々と掲載されているのを見た。鄙人は一昨年民軍起義の後、社会党に入党を申し込み、ついで天津に赴き、本部の許可を得て支部の組織に従事した。ところが警道楊以徳がむやみに干渉を加え、鄙人を死地に置こうとした。間もなく清帝が退位し、やっと毒手を免れることができた。昨年また党員を召集して成立大会を開こうとしたが、楊以徳が屢々干渉し、認可申請しなければダメだと言うので、やむなく直隸都督張錫鑾に上書して、種々認可申請できない理由を陳述し、あわせて警道が会を開くのに干渉しないよう命令を頼んだ。まさか直隸都督が軽率にも自分の代わりに内務部に認可を申請したとは、発表されて後、鄙人は始めて知ったことだ。その後、奉天省に旅行したので、党務は陳翼龍に担当してもらった。以上が鄙人が社会党天津支部を組織した往年の歴史である。法言報所載の各段落は、言葉は中傷が多く、実は架空のことである。特にここに声明し、各界の疑惑を積く。さて党員か否かも疑わしい郭究竟という人物が、まだ結成されていない天津支部の名をかたり、内務部に認可審査を申請し、それが中国社会党の不認可、非合法の宣告を導き出したとの非難は、7月26日の江亢虎の内務部への抗議・反駁の文章のそれであった。勿論江亢虎は間もなく郭を党員と認め、郭に悪意があって内務部に認可を申請したのではなく、直隸都督、内務部双方の軽率さに主たる責任があると、その論の矛先を変えた。

従って法言報の記事が、既に決着ずみの問題をむし返し、郭究竟の名誉を毀損するものと受けとめられ、郭が弁明にこれ努めたのもよく理解できる。ただ天津支部の結成、及びその後の活動が、異常な困難にさらされ、その対応に多大なエネルギーを要したことも事実である。それゆえそうした深刻な事態を招き、また中国社会党全体の前途に重大な障害をもたらした発端をつくった人物として、郭の責任を問いたくなるのも、これまたよく理解できる。ましてや宋教仁暗殺事件を機に、南方で討袁の声が高まる中、今まで順調に発展してきた、定海、淳安、沈家門などの浙江省の各支部、及び江蘇省都督程徳全のお膝元の南京支部まで、6月に入るや、弾圧の波が及んできた⁽⁴²⁾。そしてその際、口実とされたのは内務部の布告であった。従って以上より、北京の法言報というマイナーな新聞が、郭究竟の大風日報と同じく、中国社会党の新聞だということは、まず間違いなかった。

ところで郭究竟が懸命に弁解するように、この問題の最大の元凶は、楊以徳に他ならなかった⁽⁴¹⁾。執念深く弾圧の機会を伺う、この稀代の悪名高い男さえいなければ、問題はここ

まで進展しなかったであろう。彼が張本人であることは、誰一人否定できまい。そして、楊以徳の使曠に乗ったと見せかけて、それを利用して内務部に中国社会党の認可審査を要求する咨文を送った直隸都督、及び咨文が送られてきた以上、審査に従事するのは通常業務の範囲内にあるとの建て前を掲げて不認可を決定し、全国に通達した内務部、彼らもまた楊以徳の共犯者であった。

この三者の見事な連携プレーが効を奏して、中国社会党の非合法が宣告されたのである。だが強調しておかねばならないのは、これが中国社会党をのみターゲットにした、局部的な孤立した出来事では決してないという事実である。つまりこれもまた、民国初年の複雑な力関係の中で生じた、張方案、宋教仁案など一連の事件の一齣であったということである。言い換えると、民国の前途をめぐる熾烈な闘いの中で、たまたま防御の弱い鎖の環が、集中的な力で狙い打ちにされて、切れたところに生じた出来事であったと言える。そして郭究竟という人物は、道具として重宝され、振り当てられた配役を演じさせられたのである。

だとすると、郭究竟は完全に免罪されるのか。彼が極めて無邪気で、見通しが甘く、楊以徳にまんまとハメられた弱さをもつことは否定できない。だがそれは、党綱、章程の提出を拒否できない言質を不用意にも与えてしまった、中国社会党本部の書簡の執筆者にも当てはまる。更にはそうした書簡の投函を許した、最高責任者江亢虎も同じである。

そしてもし陳翼龍が郭究竟と同じ立場にあったとしたら、1月29日付、及び5月26日付の馮国璋直隸都督の内務部宛の咨文に見るかぎり、やはり巧みにしてやられ、同様の結末になったのは疑いえない。民国の誕生に過剰な期待をかけ、一挙に民主主義社会が実現したとの甘い幻想に酔っていたということでは、彼ら全体にさして大きな違いはなかった。ただ郭究竟が責められるべきは、北方であまりにも早く支部の結成を急いだこと、及び最終段階になって、党綱、章程を求められるままに簡単に渡してしまったことである。特に後者については、弁解の余地はあるまい。

さて袁世凱の独裁の野望がますます露わになり、国民党三都督罷免の先制攻撃がかけられたことを機に、7月12日、第二革命の火蓋が切って落された。7月21日、北京、天津に戒嚴令がしかれ、新聞は発行停止にあい、密偵が四方八方で見張り、逮捕と処刑が相ついだ。そして上海に出かけて北京に戻って来た翌日7月24日、陳翼龍が逮捕された。そして8月4日、ロシアの虚無党と連絡して内乱を企てたなどの罪名で、軍法によって銃殺刑に処せられた。ついで8月7日、中国社会党の解散命令が発せられ、本部はもとより各支部の事務所も封鎖され、黨員たちはそれぞれ身を隠した。

天津では、宋教仁暗殺事件の「法律解決」を主張し、袁世凱弾劾案を国会に提出した衆議院議員伍漢持が、8月8日逮捕され、19日、処刑された。彼も陳翼龍と同じく、軍政執法処で裁かれたのである。同じ日、北京では愛国報主筆丁宝臣が処刑された⁽⁴³⁾。まさしく順天時報8月4日付時事要聞欄『戒嚴令執行之現状』が報ずる如き、「人心驚惶、商業荒索」の恐怖時代が訪れたのである。しかも陳翼龍の逮捕と同時に事務所の家宅捜査が行われ、「入会簽名冊」1冊が押収されたとの消息もあり、黨員たちは戦々恐々たらざるをえなかった。まして天津には全国に悪名を轟かせた楊以徳ががんばっている以上、草の根を分けてもの中国社会党狩りが行われたことは想像に難くない。

三 李大釗と中国社会党

さて以上の天津支部成立をめぐる経緯を見てきた中で、北京の法言報という新聞が、中国社会党の立場に立つ新聞であることを、ほぼ確認することができた。ところで北京の法言報といえば、『言治』第4期に掲載された郁疑の『送李亀年游学日本序』がすぐさま思い起される⁽⁴⁴⁾。李大釗の同級生で、卒業と相前後して北洋法政学会を組織して、その機関誌『言治』月刊の編輯長に二人で当たった、その相棒の郁疑は、李大釗との交友を振り返り、日本留学に旅立つ友に送別の辞を送った。

その中で郁疑は、雑誌は月刊のため効力が極めて緩やかであるので、李大釗は「子襲明の約めに殉い、京華に襪を聯ね、法言報を主持す」と記している。郁疑によると、それは『言治』月刊第1期刊行と相前後する時期らしい。さてこの法言報が、郭究竟を非難した北京の法言報のことだとすると、李大釗が中国社会党員であったという説が、俄然、真実味を帯びてくる。

とはいえこの一事のみを以てして、李大釗が中国社会党員であったとの説が成立したとするのは、やはり早計に失しよう。その認定には、もっと多くの証拠が必要である。また郁疑が言う「子襲明」とは誰か、これも明らかにしなければならない。だがそれは後に廻すとして、李大釗と中国社会党の関わりの指摘の際に、必ずと言ってよいほど李大釗と並称される、郭須静という人物の考察から、接近の手がかりをつかむことにしよう。

郭須静が、李大釗の同級生で、北洋法政学会の会員、『言治』月刊の編輯部員であったことは、その第2期所載の会員名簿と、第1期所載の職員名冊とから、知ることができる。そして郭須静の名で、第2期に『憤世篇』、第3期に『銀価高低与対華貿易』（日本の国民経済雑誌海老原竹之助論文の訳）の二つが掲載されている。第5期に、津村秀松の論文『消費と奢侈』を『論奢侈』として訳載している郭子黙という人物がいる。郭という姓の持主は、北洋法政学会の同人の中では、郭須静一人だけである。且つ同じく日本の経済学者の論文の翻訳であるからして、郭子黙が郭須静と同一人物であるのは、まず間違いない。黙は静なり、の訓があるので、「須静」が「黙」に結びつくのは、極く順当なことである。彼の字の「厚庵」も、「須静」からの引伸義として、連想の許す範囲内にある。

さて郭子黙が郭須静だということになると、李大釗が1913年の夏から秋にかけて過ごした昌黎五峰の登山に同行したのが、子黙であったのが、すぐに想い起される。既に前稿で述べた如く、昌黎五峰の碣石山は李大釗の愛してやまない山であり、彼が訪れたのは、これが二度目であった⁽⁴⁵⁾。その時の紀行文『游碣石山雑記』によると、彼は山中に数日間滞在し、それから郷里の楽亭県に帰り、帰途再び碣石山に立ち寄ったという。そして下山して初めて、自分が山中にいる10日ばかりの間に、麓の昌黎駅で9月11日昌黎事件が起り、殺害された5人の棺が地蔵寺にひっそり並べられているのを知ったと述べている。従って下山したのは、9月の半ばすぎであろうか。彼がこの紀行文を発表したのは、1914年、彼が留学のため来日して以後である。

このとき、碣石山の韓文公祠の堂守夫婦の好意溢れるもてなしを受けて日を過ぎた李大釗は、山中から碣陽成美学館で教鞭を執る、旧友の劉允之を訪ねた。それは、自分が北京の友

人からの手紙で上京の必要が生じ、しかもその前に郷里に立ち戻らねばならず、子黙が「独り山中に処り、寂寞を嫌う」のを懸念し、劉允之に子黙を紹介しておくためであったという。

ところで何故こうした心配りまでして、郭子黙を山中に一人ぼっちで残したのか。昌黎五峰は突兀とした高山峻崖から成る険しい山々で、登山は難渋を極めていた。李大釗は後にここを官憲の追及から逃がれ、身を潜める場として用いている。この場合も、避暑や静養のためというよりは、やはり避難し身を隠すためと見た方が自然である。先に見た曹百善の談話では、郭須静は李大釗のあとを追って楽亭県の祥雲島に逃げたとあった。祥雲島のことは真偽のほどは不明だが、旧知の質樸で温かな堂守夫婦だけしかいない礪石山中が、最も安全な隠れ場であったことは、誰も否定できない事実であろう。

ところで李大釗は、郷里に立ち帰り、それから北京の友人の催促に応じて上京する心づもりをしていた。このことは、山中に一人残される郭子黙に比べて、李大釗の方が往來に危険が少ないとの判断があったものと見ることができる。勿論、言葉や土地勘の面で圧倒的に有利でもあった。しかし、先述の陳翼龍の7月12日付の手紙の中に須静の名があったことから見て、それだけ郭の方が中国共産党の日常活動に深入りし、顔を覚えられている可能性が高かったことも想像させる。

さて『游礪石山雜記』の中で、もう一つ指摘しておきたいことがある。それは、「蓋し吾等野人、久しく風塵を厭倦するの思いを懐き、さきに嘗て同志と山を買うの志を抱くも、錢なきに苦しむ」の中、「同志」なる一語のことである。同志とは何か。それはやはり、共通の主義・信条で結ばれ、共通の事業のために協力する、特別な紐帯で結び合わされた人々のことだろう。同人、友輩といった、頻繁に使われる並みの言葉と違う、何か特別なつながり、結束力の強さを暗示する言葉ではないだろうか。これは李大釗の文中では初出の言葉である。1919年2月の『青年与農村』の中では、「同心の伴侶」という言葉が用いられている。そして李の場合、同志という言葉が頻出するのは、1924年1月の国民党一大大会以降である。これは明らかにロシア語のタワーリシチに由来する、一種の組織用語に他ならない。

この「同志」という語が、なぜこの1913年に突然出現したのか。その裏に、何らかの政治結社への所属を嗅ぎつけるのは、うがち過ぎであろうか。そしてその文に続くのは、なんとか「黄金三百万」を得て、「香山浄土を買い尽し、朋輩の招隱の所と為」したいものだが、それは叶えられそうにもない、という文言である。そこには、個人的隠棲の願いではなく、「同志」を思いやる仲間意識の強さがうかがわれる。と同時に、出路の見出せぬ苦悶の淵に立つ、深い絶望感とやり場のない悲しみの感情とが、惻々として伝わってくるのである。

そしてこうした文章が書かれたということは、その背後に強烈なショックを与える経験があり、それに打ちのめされたからではないかと思うのである⁽⁴⁶⁾。民国にかけた夢が次々に裏切られ、希望に決定的に見放された出来事、それも「同志」の運命に関わる絶体絶命の出来事、に遭遇したからではないだろうか。それがもし中国共産党の解散と陳翼龍の死ということであったらと、想像は膨らむが、彼は何も語っていない。ともあれこの「同志」の一語の出現は、やはり簡単に見過さるべきではないと考える。

ところで、もし李大釗と郭須静の二人がともに中国共産党員であったとしたら、この二人の思想はどこかで深く通じ合い、重なり合うところが、当然にある筈である。従ってその点について、検討を加えておく必要がある。郭須静の思想をうかがうに足るものは、『憤世篇』

ただ一篇のみである。

まず第一に、革命後の民国の現状について、どう言っているのかを見てみよう。郭須静は、清朝の専制王朝が倒れ、民国が誕生したことは、革命の目的が達成され、共和が完成したように見えるが、それは「形式より」の評価で、「實際を以て言えば、なお未だし」だと言う。彼によると、革命は人民の自由と幸福とをもたらす筈である。だがもたらされたのは、上は議会・政府から、下は政党や各種の団体、更に個人の心理に至るまで、血眼になっての「自私自利」の追求である。それは、革命のため一身の利害を顧みず尽力し、崇拜に値すると眺めていた「革命の偉人」でさえ例外ではなかった。政党は「規党」であり、官吏は「賊民」であり、議員の罪は政党・官吏よりも更にひどい。そこにあるのは、共和の名を借りて専制の実を行なう、「多数の豪暴と少数の貴族との共和」に他ならず、「亡国の禍いは眉睫に迫」っていた。

さてこうした惨憺たる民国の状況の中で、亡国の危機を招き寄せている張本人は誰か。従って第二に、郭須静が民国の前途の最大の障害物として何をあげているのかを見ておこう。さて彼が「今日の大患」とするのは、「外患」でも「外人の瓜分」でもない。それは民国の内部にあって民国を崩壊に導く、「内患」に他ならない。それは前述の政党・官吏・議員も当然に含まれるが、それよりも何よりも、民国の統一を破壊する都督たちの存在であった。

郭須静は、「統一以後、二三の頑凶が兵を擁して自ら衛り、河東の肘腋、遽かに敢えて乱を倡え、贛粵（江西省、広東省一後藤注）の要枢、中央に梗命す。名は則ち統一なるも、実は則ち割拠なり」と言う。従ってこうした分裂状態が続くかぎり、背後からロシアやイギリスに嫉かされて、蒙古やチベットの自立化の動きがやまないのも当たり前である。そしてそれは即ち、「中国瓜分の問題」、「中国死生の問題」に他ならない。よって、「妄りに猜疑を事として、南北の悪感を挑発し、固きに負みて自ら雄とし、竊かに割拠を図りて自恣する」国民党系都督は、「実に罪魁・禍首」である。彼らに迫り、「中国は今日宜しく統一の実を謀るを力む」べきであり、政府が悪い、政治制度が悪いと言うのなら、それは変えればよい、まず何よりも喫緊の課題、それは中国のできるだけ早くの統一の達成である。

ところで、多くの革命の先烈の血を流して実現した共和の民国が、国内の秩序が回復できず、列強に分割の口実を与えるようなざまに何故なったのか。さて第三番目に、郭須静の民衆観を見ておきたい。郭の眼に映じた民衆は、「民を重んずる」共和の時代にしながら、「強有力者」に蹂躪され、「顛沛無告、死を待つに所なし」の境涯に沈み、民国の矛盾のしわよせを一身に被せられ、受難の苦しみに喘いでいた。本来、共和は民衆の幸福のためであった。にもかかわらず、民衆が哀れで無力な犠牲者となったのは、それは、「一般の人民が共和の貴ぶべきを知らず」、「今日の国民は、実に共和を安享するの程度を企め」ないからであった。

言い換えると、「民徳高く、民智足る」の水準から程遠い、受動的、客体的な「小民」の位置にとどまっており、ために共和の恩恵から疎外され、共和の困難な道程の一切のツケを背負わされたのである。従って民国の現状を打開し、本来の共和を取り戻して亡国の危機を回避する「回生の術」は何か。最後に第4番目の、民国の諸矛盾を解決する処方箋として、郭須静が提起した方法を見ておこう。

それは一言で言うと、「惟だ共和国民の教育に従事するのみ」であった。「国家は人民の集合体なり。国家社会の現象は、即ち民徳・民智の外形に表わるる者なり。これ故に、純良の

人民あれば、斯^{すなわ}ち美善の国家あり」ということになる。従って、共和の外形を内から支えるための、民徳・民智の程度の向上、つまり、「国民教育に力を致し、急起直追、以て斯^{じんみん}民を光明の域^{のぼ}に躋す」こと、これが最も根本的で、最も緊急を要する解決方法に他ならなかった。

さて以上、郭須静の『憤世篇』を四点に分けて見てきた。まず第一点の民国の現状についての郭須静の指摘は、李大釗の『大哀篇』の指摘と殆ど一致する⁽⁴⁷⁾。李の「共和は自ら共和、幸福何ぞ吾民に有らんや」、「いわゆる民政とは、少数の豪暴狡猾者の専政なり」、「民権とは、少数の豪暴狡猾者の竊権なり」、「幸福とは、少数豪暴狡猾者の掠奪の幸福なり」の糾弾は、郭の文章と見分けがつきにくい程である。政党・官僚・議員についての指摘も、両者は殆ど選ぶところがない。

第二点の民国の前途を脅やかす妨害者について、その最大のものが軍事力をバックに袁世凱に抗する、国民党系都督であることを、激しく非難したのが李大釗であったことは、既に述べたことがある⁽⁴⁷⁾。李の『隱憂篇』『大哀篇』、そして『裁都督横議』は、都督の割拠が内乱を誘発し、それが列強の瓜分に口実を与えることをいかに警戒していたかを雄弁に物語る。そして李大釗の場合、よりましな悪として「梟雄の架」=袁世凱を選び、袁に中国統一の任務の達成を託するのである。郭須静の場合も、統一の実現が最優先課題であることでは同じである。

さて第三の民衆観についても、郭須静と李大釗との間に、大きな隔りは見出せない。「愚民は共和の何ものたるかを知らず」は『隱憂篇』の発言であり、「吾等小民、固より政党の作用の奚^{なに}に似たるかを知らず」は『大哀篇』の言葉であり、「黎庶^{じんみん}の患^{うれい}は、権を護るの政制なきを思えず^{うれ}。患は権を享くるの能力なきに在り」とは『論民権之旁落』の冒頭の一句である。民衆の程度の低さ、「民徳の衰え、民力の薄さ」が、民衆の手から民権を滑り落させ、「武断蛮野の軍人」、「豪横驕喧の暴党（国民党を指す一後藤注）」、官僚、政客の跳梁を許している原因に他ならない。

従ってそこから導き出される、第四の根本的処方箋も大差はない。ただ李大釗の場合、「国民教育は、乃ち根^{ちか}を培い本^{はかりごと}を固める」としながら、国民党の人々にそれに従事するよう忠告している。別の言葉で言うと、当面は政争を止め、袁世凱に譲歩して全国統一を実現させ、10年後を期して共和を定着させる土台づくり、即ち国民の啓蒙・教育に当れと説くのである。

李大釗は、この「関わる^{おお}ところ至って鉅^{あらた}きい」国民教育のことについては、「端^{あらた}を更めて論ずる」と別稿に委ねたが、結局、それは未発表に終わった。郭須静の場合、李大釗とはちがいで、国民教育に誰が当るのか、何も語っていない。あるいは郭自身、社会党北京支部の運営する平民学校に何らかの関わりがあったのかもしれない。もしそうであれば、平民学校のことを記した、陳翼龍の7月12日付の手紙の中で「須静兄」に言及し言付けを頼んだことの辻褄が合う⁽⁴⁸⁾。因みにその手紙の中の「人庵」とは、殷仁のことである。

ともあれ、郭須静の『憤世篇』の四つの論点を、李大釗の同時期の文章とつき合わせて検討してみた。そして両者の議論が、基本的に大差なく、重なり合う部分が非常に多いことを知ることができた。そしてもし、両者の主張の根底にある思想の脈脈、源泉とも言うべきものを一言で表現するならば、それは郁嶷の李大釗を評した、「民生を以て念と為す」ということになるだろう。その「強横を抑え羸弱を扶ける」ヒューマニズム、社会の底辺にいる、

生涯辛苦して酬われることの少ない弱い民衆の生活への温かい同情の眼差し、これが両者の思想の深部に共通に流れていると見られる。だがそれは、恩恵としての、上からの民福論の域に止まり、啓蒙のエリート主義、救済意識に立脚していたと言ってよかろう。

ところで両者の文章を比較対照して、もう一つ気づくことがある。それは双方の文体、口吻が非常に似通っていることである。言葉の選び方、典拠のある修辞・成語など、共通するものも多い。あるいは李大釗が潤色を手伝ったとか、協力して文章の推敲に当たったとか、あったのかもしれない。ともあれ、背後に両者の親交の厚さを推測させるものがある⁽⁴⁹⁾。

さてここまで述べてきても、李大釗が中国社会党員だったと断定するには、やはりまだ証拠不十分である。状況証拠はいくつか挙げた。だが状況証拠による推論であるかぎり、もどかしさが付きまとわざるをえない。とはいえ決定的証拠に辿りつく可能性は、まず皆無に近い。だとすると、断片的でも状況証拠の量を多く積み上げて、説得力の強化を図るというやり方以外、術はなさそうである。さて次に宿題として残しておいた問題、即ち李大釗を北京の法言報に誘った「子襲明」とは誰か、について考察を加えてみたい。

ところで、子という苗字は中国にはない。勿論、子襲などという複姓もない。するとこの「子襲明」の三字は、一種の暗号と見てよい。つまり、仲間内の人が見れば、指されている人が誰か、ほぼ見当がつく仕掛けのものとするべきだと言うのである。陳翼龍は7月12日付の手紙で、「海上截流」と署名して、受取人に自分だということをさとらせている。

さて「襲明」という熟語には典拠がある。老子二十七章には、「是を以て聖人常に善く人を救う、故に棄人なし。常に善く物を救う、故に棄物なし。これを襲明と謂う」とある。従ってこれは、人や他の生物を、一つ残さず救済する、大道に明らかな聖人の、崇高な行為を指している。だがこれでは誰かわからない。そこで少し判じ物めいたことをしてみよう。襲明とは、明の上にものを重ねかぶせることである。だとすると明は蔽われて暗黒になる。広雅積器に、黙は黒なり、の訓があり、その王念孫の疏証に云う、「黙、亦黒字也、韓詩外伝云、黙然而黒」と。従って暗黒から「黙」に逆方向に連想が及ぶと考えられないであろうか。だとすると、「子襲明」は「子黙」ということになり、郭須静を暗示できることになる。

そして、一方で老子の大道に明らかな、善く人や他の生物を救済する聖人のイメージをこめ、他方で「子黙」を明かす、という二つの役割を果たすために、敢えて「子襲明」という三字が使用されたと考えられないであろうか。また郁疑は自分の友人について、姓+子+名前て記す例が多く（第1期の『游焦山記』など）、従ってこの「子」は、彼の友人であるとの意味をも込めたものとする事ができる。古来、表音と表意の二つの機能を一身に兼ね備えた、漢字を使用する中国人は、さまざまな言葉遊びを工夫して、楽しんできた歴史をもつ。そして李大釗の仲間たちも、その例外ではなかった⁽⁵⁰⁾。

李大釗の字の守常は、元の字の寿昌と発音が通じている。彼の入塾時の学名は耆年である。彼は『言治』月刊第1期に『更名龜年小啓』を載せた。龜年は、一方では杜甫の『江南逢李龜年』をふまえつつ、他方では耆年と同じく長寿の意を失なうことなく保持させている。李大釗の学友の白堅武の原名は白見五であり、これも改名の際、原音は損わずに残したことになる。第3期には王愴の『雪影樓謎存』も載っている。さてそうした伝統を前提にすると、「子襲明」の三字は、筆者の如き解釈もまんざら成立しないこともあるまい、と考えるのである。

ところで名前を変えるとは、一体いかなる動機が背景にあり、一体いかなる意味をもつのか。李大釗自身は、『言治』月刊第4期から、それまでの李釗の署名を李大釗に更めている。郭須静も同じく『言治』月刊第3期までは郭須静の名を用い、第4期に執筆はなく、第5期では郭子黙と署名している。1913年の夏をさかいに、李と郭の二人とも『言治』月刊誌上の署名を変更した。これは、全くの偶然の一致によるものであろうか。

そして確かに『言治』月刊第1期で、李亀年への更名を宣言したものの、李大釗は『言治』月刊誌上ではついでその名を用いたことがない。だのに郁疑は何故『送李亀年游学日本序』で、わざわざその名を持ち出したのか。「子襲明」のことを考え併せると、これは郁疑の単なる気まぐれではなく、深い用意があつてのことと思われてならない。また白堅武も同じく第4期の「贈友」と題する詩の中で、「李亀年 蔽明」について詠んでいる。

それではせっかく更名を宣言した李亀年という名は、結局、一度も使われなかったのだろうか。ところが実はそうでもないらしい。というのは、『公論』(Public Opinion) 1巻4号(1913年7月16日)の文藝欄の詩録の中に、李亀年の署名をした詩が一篇掲載されているからである。そもそも『公論』という半月刊誌は、中国社会党北京支部に所属する党员の有志が出している雑誌である。その執筆陣の中には、嘗て陳翼龍に北京支部の責任者になることを要請された温雄飛もいた。

ところで『公論』に掲載された詩は、実は彼が来日後に出版された『言治』月刊第6期の『筑声劍影樓詩五首』の中の、円明園故址を望んでのものである。従つて『言治』月刊第6期に初出のものではない。そればかりか『公論』も詩録とするからには、他の新聞や雑誌に載つたものを再録したものである。だとすると何に最初に載せられたのか。自らが編輯に當つていた法言報と見るのが最も自然だと思われる。

もう一つ、中国社会党北京支部の党员が法律書報社をつくり発行した『生計』(National Wealth)という旬刊誌がある。その第11期(1913年5月1日)の訳著欄に、李大釗の訳した『托爾斯泰主義之綱領』が再録されている。これは明らかに『言治』月刊第1期から採つたものであり、署名はそのまま李釗となっている。また同じく社会党系の『大同週報』第2期(5月11日)にも『托爾斯泰主義之綱領』が再録されている。

李大釗の『言治』月刊上の文章が好評で、他の雑誌に転載されることが多かったとは、郁疑の些か誇張を交えての証言であつた。例えば他に、北京の政治研究会刊行の『国是』第1期(1913年5月20日)選録欄に、大哀篇(言治雑誌)李釗、また『憲法新聞』第5冊(同5月11日)に『弾劾用語之解紛』があるのを見つけた。勿論この二つは、中同社会党系のものではない。

従つてこの時期、彼が編輯に當つた二つの出版物で、李亀年の署名を用いるのと用いないのと、使い分けを行なつていたのではないかと、との推測が成立する。そして『更名亀年小啓』は、それを北洋法政学会の友人たちに告げるものと見られる。そしてその使い分けを知ればこそ、郁疑は李大釗が無事に日本留学に旅立つことを、わかる人にわからせたいとの願いをもつて、敢えて李亀年の名を持ち出したと思われる。だが考えてみると、まだ出発前ではまずいとの懸念を持たれるかもしれない。しかし当時の警察官や密偵の文化水準のお粗末さからみて、その心配は無用のようである。あるいはもう出国したとして、搜索を打ち切らせるためのアリバイに使えたのかもしれない。そして、『游碣石山雜記』を逆に遅らせて来

日後に発表したのも、郭須静の安全を見届けて、尻尾をつかませないための配慮が働いたとも考えられる。そして李龜年という名前はこれ以後、二度と使われていない。

李大釗は1913年の暮から14年の年頭にかけての頃、日本留学に出発した。その目的は、郁癡によると、「専ら社会経済学を究め、民生凋敝の原を研究し、強横を抑えて羸弱を扶くる所以のものを探り」、底辺の民衆に役立てるため、であった。そして郭須静の方はどうなったか。先述の曹百善の談話では、李大釗と共に日本へ行ったとあるが、李大釗自身は張潤之（沢民）、李培藩（凝修）と一緒に来日したと述べていて、郭のことはふれていない⁽⁵¹⁾。

郭須静は1920年12月の終り、河南省の公費留学生として、フランスに園藝学を学びに出発した。それまでの経歴はあまりよくわからない。1919年1月7日付『北京大学日刊』に日本の新大学令について紹介とともに訳文を載せている。また1920年の初めには郷里の開封市で心声雑誌社に参加し、その2巻1期に、空想的社会主義者について述べた訳文『理想家的社会主義』を載せている⁽⁵²⁾。1923年に帰国して後は、河南省立農業専門学校長、上海労働大学農学院院長、南京中央大学農学院園藝学主任などを歴任して、1934年に死亡とのことである。接木、挿木などの技術に優れ、品種改良に努力したといわれ、香蕉苹果と玫瑰香葡萄は彼がフランスで作ら上げた新品種という⁽⁵³⁾。

さて最後に、筆者の入手できた『言治』月刊第4期までの広告を見ておこう。『支那分割之運命駁議』と『蒙古及蒙古人』は、北洋法政学会刊行である。それ以外、明らかに社会党系の広告としては、法律書報社発行の『瑞士共和政治』、惜陰公会発行の社会雑誌、大同週報、中華実業叢報、公論報、万国女子参政会旬報がある。西北協進会の西北雑誌と『桃源痛史』とは国民党系と見られ、また明らかに進歩党系の広告としては、憲法新聞、神州叢報、讜報がある。上海協和報はドイツ人の発行したものである。

その他、鉄路協会雑誌、憲兵雑誌、中国地学会雑誌、中華警察協会雑誌、法学会雑誌、軍学雑誌、『新絵蒙古詳図』については、その政治的色彩は多様である。ともあれ『言治』月刊の広告に社会党系の出版物が相当数を占めていることは、当時の類似の雑誌の中では珍しいことに属する。

これは正しく第1期の『言治宣言書』で郁癡が述べる、「兼収并包」を旨とすることの反映としてよかろう。因みに第4期の本会啓事一によると、『言治』月刊は每期「四十分之多」の売れ行きを示していたという。従って以上より、『言治』月刊が社会党にも門戸を開く、幅の広さをもっていたことがわかる。そして李大釗が郁癡と二人で編輯部長を担当していた以上、彼ら二人の社会党に寄せるのシンパシーを雄弁に物語るものと見てよかろう。

四 おわりにかえて

さて、断片的な証拠を寄せ集め、その間を筆者としてはできるだけ合理的な推論によってはぎ合わせ、恰もパッチワークのような作業を進めてきた。その結果、以下の如き結論がひとまず引き出された。それはまず第一に、張次湏や顧頡剛・曹綏之・曹嘉蔭、及び曹百善の言うように、李大釗が中国社会党の天津支部の責任者とか総務幹事であったなどの説は、とても考えられないこと、次に第二に、1913年の『言治』月刊第1期の出版と相前後して、郭須静に誘われて北京に出て、中国社会党の新聞法言報の編輯に携わったこと、そして第三に、

1913年の7月の終りから開始した、中国社会党に対する猛烈な弾圧の嵐の際に、郭須静を伴って碣石山に身を隠したこと、そして多分、郭須静の方が追及の手が厳しかったこと、以上である。

もし以上の筆者の結論が成立を認められるとすると、中国社会党の性格について、また李大釗の思想について、今まであまりはっきり見えなかった、新しい視野が切り拓かれるように思われる。それは、中国社会党が李大釗や郭須静の如き、国家の統一への強い願いのあまり、袁世凱の擁護にまわり、進歩党のリーダーたちとも関わりをもつといった、思想的不安定性をもつ人々をも抱えこむ、幅の広い結社だったということである。

思想的な多様性を許し、政治的立場の相当に違う人々までもどしどし入党させた、包容力の大きさは、しかし他面、思想の不純性、無原則性を認める折衷主義につながらざるをえない。ゆえに弾圧の嵐が襲いかかるや、瞬く間に組織は空中分解し、黨員は雲散霧消して、後には何も残らないという頼りなさを露呈することにもなった。とはいえ、400有余の支部、50万人以上の党勢は、史上まれに見る偉容であったのは否定できない。

このことは、民国の誕生が、共和の実現の次は民生の安定、民衆の幸福な生活の保証だとの、確信と勇気を鼓舞するものであったことを、端的に物語る。そして、いわゆる知識分子に限らない、むしろそれまで政治から疎外されてきた一般の民衆をも引きつけ巻きこんだかゆえに、中国社会党はこれ程までの規模を誇れたと言える⁽⁵⁴⁾。要するに、中国社会党は一般民衆の日常的な切実な要求を実現する、ネットワークを作り上げたのであり、それが党勢の未曾有の増加の秘密ではなかったかと思われる。

そして弾圧の後には何も残らなかったということは、亡命など思いも寄らない下部の一般黨員が、じっと耐えつつ日常生活を送り、文字手段を駆使して宣伝に従事したり、自己を表現する能力をもたなかったことを示すものとも見られる。従来中国社会党の研究は、資料が少なかったことも加わり、江亢虎を中心として進めてきすぎたのではないかと思う。だが文化水準の低さを嘲笑されてきた陳翼龍の如き、一貫して献身的に地道な活動を進めてきた、言挙げのできない無名の一般黨員が、実は中国社会党の裾野の広さを支えてきたのではないだろうか。もし江亢虎あっての党なら、彼が帰国して1924年、中国社会党の再建にのり出した時、嘗ての黨員の内、彼の旗下に馳せ参ずる人が余りにも少なかったことの説明ができない。

従ってこれからの中国社会党の研究は、各地でいかなる活動がくり広げられたかを具体的に明らかにし、下部の黨員たちがいかなる形でそれに参加したか、彼らは何を目指し、いかなる思想に支えられていたかという側面から接近していく必要がある。もしそうでなければ、民国初年の中国社会党が多くの人々の結集核としての作用を果たした、思想史的意義の解明ができないであろう。相も変わらず夢想（その三無二各学説についての評価）だ、いや社会政策だ（劉師復『孫逸仙江亢虎之社会主義』など）、等の一言で片づけていては、中国社会党の性格、その実際に果たした役割についての研究は、一歩も前進しないことになる。

李大釗の思想については、表面上の政治的立場、発言の根底に、まるで岩盤の如く、民衆の幸福な生活を念頭する、ヒューマンイズムの精神が横たわっているのを知ることができた。従って余りにも表面に形をとって浮んできた、政治的主張にとらわれすぎると、その真の姿を見失うことになりかねない。換言すると、その根底にあるヒューマンな心情が、いくつか

の政治的方向の選択肢の一つをたまたま選んだにすぎず、情勢の変化が、またそれを他のものに変えることもあるということである。つまり政治的党派性が先行するのではなく、深層にあるヒューマンイズムの精神が最終的規定要因として働かし、その時々政治的対応を形成するということである。

これは、李大釗の思想に特有の、一種の二重構造と言えるかもしれない。従って、郭須静のように単純で一直線ではない。はるかに複雑で、さまざまなチャンネルを通して行くべき方向を見定めようと試行錯誤し、紆余曲折の道を辿る。それゆえに、研究者の方もそれなりの分析力が要請される。ともあれ中国社会党との関わりを視野に入れれば、日本留学以後の彼の思想の変化も、また違った一面を見せることになる。 (完)

注

- (1) 張玉法『民国初年の政党』（中央研究院近代史研究所 1985年）は末尾に民初党会調査表を付し、政治類に属するものだけで313あげている。
- (2) 中国第二歴史檔案館編『中国無政府主義和中国社会党』（江蘇人民出版社 1981年）所収の中国社会党天津部成立大会伝単では、支部四百九十余処、黨員五十二万三千余人とある。同上所収の1924年の中国社会党復活宣言では、支部四百余処、黨員五十余万人としている。民立報1911年11月24日所載の『中国社会党規章』によると、黨員五十人以上之城郷では支部を設置できるとあり、注(4)の張玉法論文では、支部176をあげている。在上海日本総領事館『支那ニ於ケル政党結社調査』（1912年12月）は、支部253を数えあげているという（未見）。なお当時、一人でいくつもの政治結社に入る跨党分子も多く、組織原則も黨員の自覚も極めてルーズであった。
- (3) 注(4)の呉相湘論文では、陳布雷回憶録が社会党入党のことを述べていないと指摘する。都市下層民衆の参加が多かったとはいえ、著名な人物、また後に各界で活躍する錚々たる人物も多く、しかも多面的な活動を活潑に繰り広げているのに、なぜ殆どの人が自分の経歴の中の社会黨員の時期について語らないのかは、非常に大きな謎と言える。
- (4) 呉相湘『江亢虎与中国社会党』（中国現代史叢刊第二冊 正中書局 1960年）。小島淑男『中国社会党と社会党』（中国研究18 1971年）、同『辛亥革命期の労農運動と中国社会党』（歴史学研究別冊特集 1971年）。曾業英『民国前後の江亢虎和中国社会党』（歴史研究1980年6期）。張玉法『民国初年の中国社会党』（中央研究院近代史研究所集刊20期 1991年）。
- (5) 南京市歴史檔案館編『審訊汪偽漢奸筆録』上（江蘇人民出版社 1992年）参照。
- (6) 里井彦七郎『李大釗の出發』（『近代中国における民衆運動とその思想』所収 東大出版会 1972年）。拙稿『初期李大釗の思想』（日本中国学会報26集 1974年）など参照。
- (7) 民立報1911年11月24日『破天荒之社会党』。
- (8) 民立報1912年1月1日、2日『大總統与社会党』（一）、（二）。
- (9) 民立報1912年1月31日『社会党之宣言』。
- (10) 民立報1912年2月5日公電。同5月31日社会党消息欄『特別廣告』。
- (11) 民立報1912年5月26日社会党消息欄『社会党致各团体啓』、同28日公電。
- (12) 民立報1912年4月6日『請英国博士介紹見總理』。
- (13) 民立報1912年6月4日社会党消息欄『漢口部来函』。
- (14) 民立報1912年5月28日社会党消息欄。
- (15) 1912年6月11日『張錫鑾關於中国社会党天津支部請求立案咨』（『中国無政府主義和中国社会党』）

所収)。以下4月27日の手紙まで同様である。なお前任の巡警道も揚以徳の筈であるが、民国元年の新任ということで、清朝時代と違うことを強調する無言の圧力として、故意にこうした言い方をしたとも考えられる。大風日報は、注(4)の呉相湘論文の注(10)によると、中国社会党の新聞の一つとして認められている。

- (16) 民立報1912年5月31日『江亢虎之北京行』。
- (17) 民立報1912年5月29日社会党消息欄『江亢虎宣言』。
- (18) 民立報1912年6月20日, 21日社会党消息欄。
- (19) 『張錫鑾檢送中国社会党章程党綱咨』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)。
- (20) 『内務部關於中国社会党宣告規章与臨時約法抵触應不准立案咨稿』(同上所収)。
- (21) 『江亢虎關於直隸支部假冒名義立案致内務部呈及内務部批』(同上所収)。
- (22) 『内務部批復稿』(同上所収)。民立報1912年8月2日社会党消息欄。
- (23) 民立報1912年7月30日社会党消息欄『江亢虎君致袁總統書』。
- (24) 民立報1912年8月14日社会党消息欄『新市部致内務部電』。
- (25) 民立報1912年8月21日專電欄北京電報。
- (26) 民立報1912年8月27日『江亢虎虎口逃生』。
- (27) 『内務部關於中国社会党破壞現行制度通行各省不准立案文稿』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)。
- (28) 民立報1912年9月4日社会党消息欄『中国社会党總代表江亢虎致本部赴湘代表余菊儂書』。
- (29) 民立報1912年9月13日社会党消息欄。
- (30) 民立報1912年9月15日, 10月29日社会党消息欄。同11月29日, 12月15日, 12月31日, 1913年1月18日中国社会党消息欄。
- (31) 『陳翼龍要求政府不得干涉中国社会党天津部開成立大会呈及内務部批』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)。
- (32) 『馮国璋關於應否准許中国社会党設立天津部事務所啓』(同上所収)。
- (33) 『中国社会党天津部成立大会伝單』(同上所収)。
- (34) 『陳翼龍為中国社会党天津支部開會遭警庁強迫解散提出質問函』(同上所収)。
- (35) 民立報1913年5月6日, 10日, 17日中国社会党消息欄。
- (36) 『内務部等取締中国社会党天津支部有關文件』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)。
- (37) 同上。
- (38) 同上5月26日直隸行政公署咨野中に, 「現尚未奉部覆」とある。
- (39) 『内務部等關於取締中国社会党張家口分部電』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)。
- (40) 注(36)に同じ。なおおこの中で取り沙汰されている傅文郁については, 1919年11月30日大阪毎日新聞の沢村幸夫署名記事「支那婦人の愛国女権運動」参照。
- (41) この天津に居座わる名うての弾圧狂については, 夏琴西『楊以徳其人』(天津文史資料選輯第3輯)参照。民立報1912年2月25日『共和罪人揚以徳』, 同1913年5月18日『天津橋畔杜鵑声』, 同6月7日『揚以徳吹牛手段』, 同6月23日『揚以徳尚畏西報』, 同8月12日北京電報など参照。
- (42) 民立報1913年6月14日, 15日, 20日, 23日中国社会党消息欄, 同6月29日, 7月7日, 13日中国社会党本部消息欄。
- (43) この間のニュースについては, 民立報のほか, 時報, 申報, 順天時報, 及び『京師警察庁請通電各省解散中国社会党呈』, 『内務部警政司關於殺害陳翼龍案与京師警察庁往来函件』, 『大總統解散中国社会党會』(『中国無政府主義和中国社会党』所収)参照。
- (44) 雑誌にはよくあることだが, 『言治』月刊も, 発行期日と実際の発行日とが大幅にずれる場合もあったようである。特に第4期以降にそれが目立つ。「国内紀事」, 「国外紀事」を中心に, 更に掲

載されている文章の内容を加味して推測するに、第4期は、9月下旬から10月上旬くらい、第5期も同じく11月下旬から12月上旬くらいの発行と見られる。第6期になると更に遅れ、「大正政変」後の山本内閣の組閣を記していることから、13年の3月か4月くらいと思われる。従って来日して後に原稿依頼の手紙を受け取った李大釗は、さきに来日していた友人の夏勤と相談し、夏勤の訳したメインの『自然律与衡平律』に紹介文をつけて発表させている（『“自然律与衡平律”識』）。

- (45) 拙稿『李大釗における自然と人生』（信州大学人文学部特定研究報告書 1995年）
- (46) 李大釗の『原殺（暗殺与自殺）』（『言治』月刊第4期）の後半部分の自殺についての文章を想起されたい。
- (47) 『言治』月刊時期の李大釗の思想については、注(6)の拙稿参照のこと。
- (48) 北京支部の開設した平民学校については、縁起簡章、縁由書、平民学校簡章、が、前掲の『中国無政府主義と中国社会党』に収録されている。ただ一律に学費を免除、更に教科書やその他の校内で使用する学用品の支給は、経済的負担が大きく、陳翼龍はそのことのやりくりが大変だったようであり、7月12日付の手紙でも、そのことについてふれている。相当の無理をして金を捻出した苦勞が、却って人に誤解されてあらぬ疑いをかけられたこともあったようで、手紙の中で述べる国維という人の中傷はその一つである。『民声』12号の葉紉芳（かつての南昌支部主任幹事）の『致江亢虎書』の中でも、陳翼龍を「不学無術、殉利忘身之人」と誹謗している。
- (49) 郭須静の生年について、橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（原本は1940年発行）は、1889年とし、明山『河南早期献身農業教育的郭須静』（河南大学学报 1984年第6期）は1895年とする。1889年ならば李大釗と同じである。1895年生まれなら、当時17、8歳となる。ただ北洋法政専門学堂の入学規定は16歳以上となっているので、1895年生まれでは些か無理がある。
- (50) どの国でも、ことば遊びは盛んであり、日本でも、洒落、駄洒落、地口、回文、落語のオチ、尻取り、等々、古来大いに楽しみ競い合ってきた。中国もまた然り、漢字を生んだ、長い歴史と文化の伝統をもつ国であり、ことば遊びをとりわけ愛好してきた国であり、日本の比ではない。廟会では猜灯迷を楽しみ、宴会では当意即妙の酒令を競う。一つの漢字を切り離したり（卯金刀などの析字）、発音の同じことを用いたり（气管炎=妻管嚴、五七一工程=武起義工程など）、順口溜（語呂合わせ）、字謎、歇後語（和尚無傘→無法（髮）無天など）寶滔夫人の回文詩等々、枚挙に暇がない。古典・故事・史実への通暁、文字学、音韻学の知識などが試される、中国文人の知的遊戯として、これほど高尚な趣味はない。韜晦の達人魯迅は特にこれを好み、中国近代の文学者の中でもとりわけ膨大な量のペンネームを駆使して、自嘲したりあてこすったりパロディ化してみたり憤懣を表わしたり等々、魯迅に教養の程では及びもつかぬ後代の研究者を苦悩に追い込んでいる。魯迅の『阿Q正伝』のQの意味についてなど、汗牛充棟もただならぬほどの考証論文が書かれている。新説、奇説、珍説と、いつ定説や通説ができるのか、魯迅を冥界から呼び戻さぬかぎり、決着のつきようがない。その奇説を一席。Qとはqueue、弁髪のことである。実はこれが第一義的に弁髪を表わす英語で、plait, braid, pigtailなどはお下げ髪の色から当てはめ連想した語である。A Queue とは一本の弁髪=一人の中国人である。と同時にaは不定冠詞であるから、特定の固有名詞をもった人間の頭の上から垂れ下がった弁髪を指すわけではない。不特定の弁髪、即ち不特定の中国人、即ち中国人というもの、顔のない中国人、すべての中国人である。queueは列でもある。弁髪列。タテに並べれば、親から子、子から孫へと、弁髪を受け継いできた歴史である。横に並べれば、人間の個性は消え失せ、弁髪行進があるのみ、順良、忠実な臣民があるのみである。またいくら母方の姓とはいえ、魯の姓に迅の名とは、いささか形容矛盾である。あるいは「魯人以為敏」（左伝文公15年）を意識したのか、また母に自分は魯男子だから、取越苦勞無用との信号を送ったのかもしれない。

- (51) 『“自然律与衡平律” 識』。李培藩も李大釗と同じく早稲田大学に入学しており、一年次の成績一覧表では隣の欄に記入されている。
- (52) 『北京大学日刊』になぜ郭須静の訳文が載ったのか、そのいきさつは全くわからない。当時、李大釗は北京大学図書館主任であり、『北京大学廿週年記念特刊』（1917年12月）の法科三門研究所同学録によると、郁巖は経済学の研究テーマのもとに在学中である。従って郭もあるいは聴講生などの形で、北京大学で学んでいたか、また李大釗の関係で毛沢東がそうしたように北京大学図書館でアルバイトをしていたのかもしれない。心声雑誌社は、馮友蘭、嵇文甫、徐旭生などが結んだものである。郭須静の参加は遅く、時間的にも短かかったのではないと思われる。『理想家的社会主義』は、『五四運動在河南』（中州書画社 1983年）に節録されている。
- (53) 注(49)の明山論文に拠る。なお橋川は北京大学図書館主任に任じたことがあるとするが、北京大学図書館の檔案の中にはそうした資料はない。明山論文、北京大学日刊の『日本之新大学令』の提供、及び北京大学図書館の檔案資料の調査には、北京大学図書館学系の王世儒先生の御好意を賜わった。
- (54) 中国社会党の下層民衆への広がり、また中華民国工党、中華民国農党について日本で研究の先鞭をつけたのは、注(4)の小島淑男の二つの論文と、同『辛亥革命期における工党と農党』（歴史評論1971年11月号）である。当時の青年達が社会主義に熱い想いを寄せたのは、毛沢東の例（エドガー・スノー『中国の赤い星』第四章第2節「長沙時代」）、梁漱溟『我的自学小史』第11節「激進於社会主義」、顧頡剛（『新世界』第4期『答蘇部党员顧誦坤書（附顧君原書）』崇俠）やその友人の葉聖陶（『良心』第2期）更に惲代英（日記622頁に「民国元・二年，同盟及社会党的健全分子，差不多都是這樣的好人」とある）、当時、杭州の浙江省立第一師範学校学生であった楊賢江（民立報1913年6月17日中国社会党消息欄「杭州楊賢江君索規章及人道週報」）の例など、枚挙にいとまがない程である。